

[徳島千田蘭盆組踊之図] 一巻

紙本着色 三四・七×五七八・〇 徳島・原田氏蔵

本絵巻には、徳島城下の内町から新町にかけての家並みに挟まれた町人地の通り沿いで練り広げられた、各町組による組踊りを中心に、俄を演じる人、さまざまな屋台、夕刻からの踊りに先立つて音頭の組々が自慢の唄を競い合う姿、そして多くの見物人で溢れた徳島城下の盆踊りの賑わいが描かれている。

「へうら（堀裏）評判所」の万灯や、擬宝珠のついた欄干が印象的な新町橋、そしてその東詰に置かれた札辻番所の木戸、さらに西新町船場の西の端、御免許町の東端の石場渡に設置された「石場評判所」などを描き込みつつ、徳島城下の実景を、空間的な破綻を回避しつつ画面構成は見事である。年々新たな趣向を凝らした組踊りと、盆踊りで沸き返る徳島城下と人々の姿を、具体的に知ることのできる貴重な記録といえよう。



長刀鉾を曳行する祇園会踊。



江戸で人気の七変化舞踊「遅櫻手爾葉七字」に影響を受けた越後獅子踊。



左端の置屋台では俄が演じられる。
拳踊を挟んで、右端には女装した見物客もいる。



新町橋の上では石場組と佐古町八丁目組とがひしめき合う。

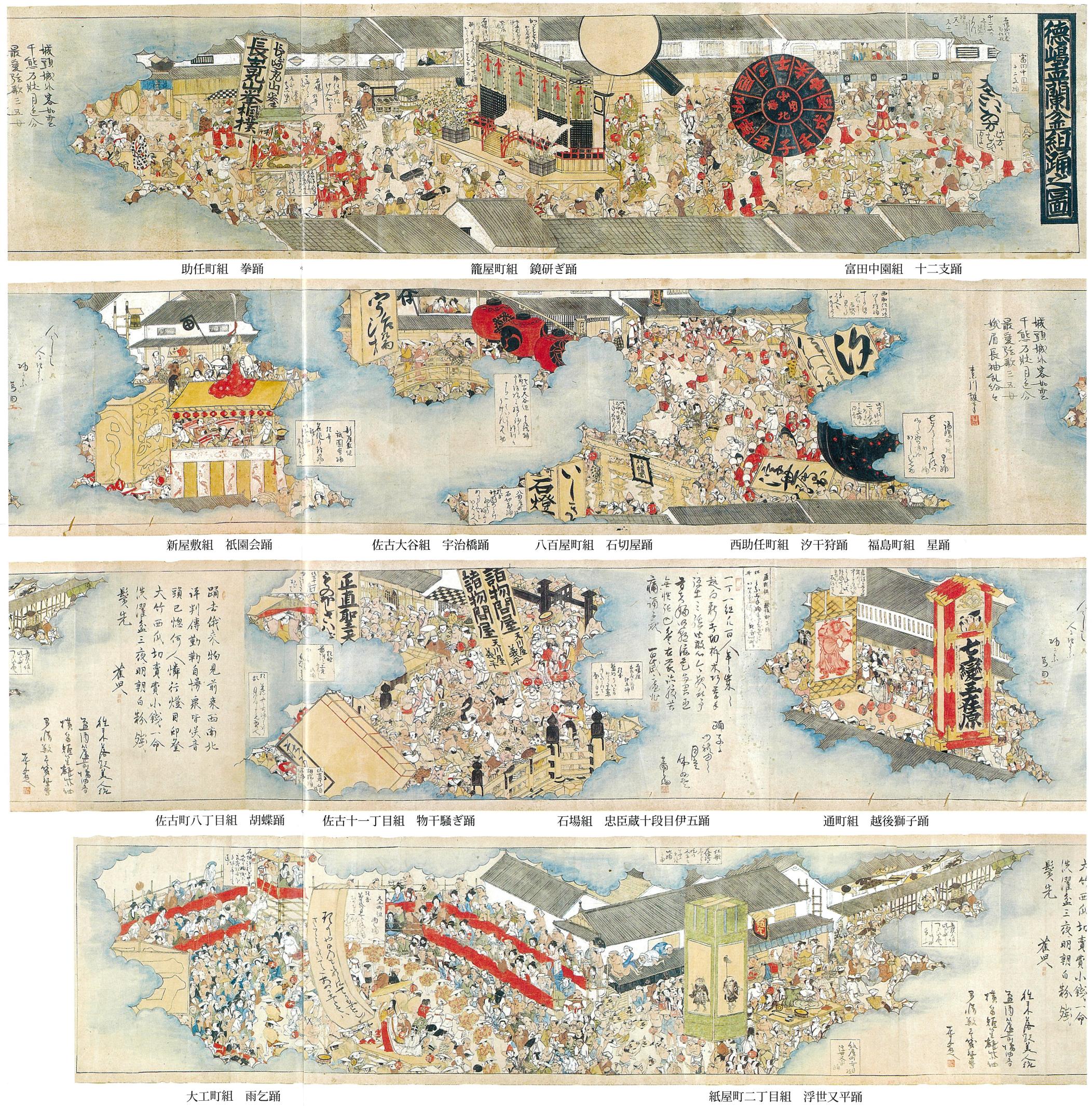


蕎麦屋の老舗・大坂屋砂場の店先では音頭の組が集い、唄を競う。

[参考文献]

高田豊輝「徳島盆組踊之図の年代」（『徳島の歴史民俗研究録』私家版、二〇一一年）
小川裕久「徳島城下の盆踊りをめぐる言説と表象」（阿波踊りシンポジウム企画委員会編『阿波踊り－歴史・文化・伝統』第二十二回国民文化祭徳島市実行委員会事務局、二〇〇七年）

徳島玉蘭盆組踊之図



《徳島玉蘭盆組踊之図》の伝来について

《徳島玉蘭盆組踊之図》(以下「組踊図」)は近年表装が仕立て直され、面目を一新した。その際、当然ながら「阿州盆祭図」と墨書きされた、もとの外題や、貼り込まれていた紙片などもそのまま新たな巻子に移されるなどの配慮がなされた。本稿ではこれまで未紹介であった「組踊図」の巻末に貼り込まれた、この紙片について触れ、「組踊図」伝來の経緯の一端を振り返ってみたいと思う。

紙片中央には朱文長方印「東讀菊池家藏圖書」が捺されており、「組踊図」が、かつて東讀の菊池家で所蔵された時期のあつたことが窺える。菊池家といえば高松藩儒の菊池家などが想起されるが、残念ながらこの蔵書印主の詳細については今のところ不明である。ただし「組踊図」が伝來の過程で徳島の地を離れ、東洋橋印「原田量之」が捺される。また下方には「昭和二十四年十月/上捲キ修理/表装ニ當リ/卷頭ニ在」と記され、朱

リシヲ此ニ「移貼ス」久々原香竹堂主人との記載がある。すなわち昭和二十四年(一九四九)十月に久々原香竹堂が原田家からの依頼を受けて修復を手掛け、表装を改めるにあたり、菊池家の鑑藏印が巻末に移されたことが窺える。

香竹堂は、本名を久々原高吉(くくはらたかきち)といい、戦後、原田家に五年程住み込んでいた表具師である。身寄りとしては大阪方面に娘が一人いたものの消息は不明。そのためN.H.Kラジオ番組「尋ね人ヨリ枕草子」で「原田量之の父は久々原香竹堂だ」と紹介された。昭和二十七年頃、身寄りもないまま同家で逝去したという(以上、原田弘也氏の御教示による)。

次に「組踊図」の伝来を書きとめた原田量之(一八九五~一九七二)について述べてみよう。原田家は代々藍商・酒造業などを営んでおり、量之の父、原田佐之治(一八七四~一九三六)は慶應義塾に学び、徳島県議会議員として活動を経て、衆議院議員となり、政友本党の労務委員長などを務めた政治家でもあった。原田量之もまた國府町議や町長、徳島県会議員や議長などを歴任したことで知られる。この量之の妻千代の実家が「徳島大工町森家」であった。

千代の実父、森政一(一八七九~一九六八)は太中と号し、湯浅桑月に学んだ画人としても知られる人物で、岡本牛橋に詩文を学び、謡曲にも巧みがあり、森政一から淡交會初代徳島支部長の坂東宗稟に贈られた氏家常家でもあった。ちなみに徳島城博物館には、森政一から贈られた氏家常作『玉藻焼ア波花火』(坂東佑一郎氏寄贈)が所蔵されている。

その子、森堯之(一九一五~四四)は洋画家として知られる。ショーレアリストの影響を受けた堯之の

参考文献

江川佳秀「阿波人物志」(原印刷出版、一九七三年)

藤井喬「近代徳島の美術家列伝 明治から第二次世界大戦まで」(徳島県立近代美術館、二〇〇〇年)



(当館学芸員 小川裕人)

前衛作品は画壇の注目を浴び、独立美術協会や美術文化協会に作品を発表するものの、昭和十六年に出征。惜しくもビルマの地で戦病死した。夭折の画家であり、現存作品も少ないものの、近年その画業は再評価されつつある。

このように森家は、書画骨董や美術に造詣が深い人物を多数輩出していることが確認される。「組踊図」を入手し得たのも、こうした文化的な関心と高い教養を持つ家系であつたことによるものである。しかし、このように森家は、書画骨董や美術に造詣が深い人物を多く親族の間で分割、譲渡したといふ。「組踊図」が森家を離れ、原田量之に譲られたのも、こうした事情があつたのである。

昭和十九年(一九四四)、徳島市大字大工町にあった森家に建物の強制疎開が命じられる。家屋は取り壊され、國府町に引き移ることになつた際、森家は所蔵していた美術骨董品の多くを親族の間で分割、譲渡したといふ。『組踊図』が森家を離れ、原田量之に譲られたのも、こうした事情があつたのである。

森家から原田家へ、「組踊図」は所蔵者を変えながらも、その後、徳島の歴史を物語る貴重な資料として、もまた國府町議や町長、徳島県会議員や議長などを歴任したことで知られる。この量之の妻千代の実家が「徳島大工町森家」であった。